

校内研究 小学部

<研究主題> 「多様化する児童生徒の学びを支える指導・支援のあり方を探る」

<サブテーマ> 「多様化する児童の実態把握とその実践」

1 目的

- (1) 多様化する児童の姿を客観的な方法で捉える。
- (2) 特性に応じた指導・支援のあり方を探る。

2 研究内容

- (1) 児童の課題を明確にするアセスメントを行い、児童についての共通理解をする。
- (2) 特性に応じた授業のポイントをまとめる。

3 研究方法

- (1) アセスメントシートを活用し、実態把握をする。
- (2) 研究授業を行い、特性に応じた授業のポイントや支援のポイントを検証する。

4 研究計画

	月	研究内容
1	4/21(木)	全体研究会「今年度の校内研究について」
2	5/23(月)	学部研究①「今年度の学部研究で取り組みたいこと・意見交換」
3	6/3(金)	学部研究②「研究内容・研究計画について」
4	7/4(月)	学部研究③「抽出児童のアセスメント共通理解①」
5	7/14(木)	全体研究会「各学部の研究内容・研究計画について共通理解」
6	8/22(月)	学部研究④「アセスメント共通理解②・研究授業指導略案提案」
7	9/8(木)	学部研究⑤ アセスメントツール Vineland II 研修会 岩手大学准教授 鈴木恵太氏
8	10/20(木)	学部研究⑥「対象児について Vineland II と Co-MaMe によるアセスメント」「指導案について『青松としての形式提案』」
9	11/11(金)	学部研究⑦「実態把握を深め、学習指導案を基に授業を想定しての支援方法検討」
10	12/6(火)	学部研究⑧「研究実践のまとめ提案」
11	1/18(水)	学部研究⑨「研究実践のまとめ」
12	2/7(火)	学部研究⑩「研究実践のまとめとアンケート記入」
	2/28(火)	全体研究会「今年度の学部研究のまとめについて共通理解」

5 研究報告

- (1) アセスメントシートを活用し、実態把握をする。

①これまでの知能検査結果等を記載した「基礎情報」を作成して、共通理解を図る。

「日本版 WISC-IVによる発達障害のアセスメント」(日本文化科学社)を参考にし、外部での検査結果から考えられること及び授業における課題と現在行っている取り組みについてまとめた。

②2種類以上のアセスメント方法を活用して、客観的に課題を捉える。

アセスメントツールの一つ目は「Co-MaMe」(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所作成)を使用した。対象児について『教育的ニーズ・チェックリスト』を実施し、複数の教員がチェックした項目、さらに「心理面」と「学習面」をリンクさせ、「学習に向かうことができる心理を保障」し、「その状態を持続できる学習方法の提供」をめざし、『整理用シート』を作成した。

アセスメントツールの二つ目は「日本版 Vineland II 適応行動尺度」を使用した。広く知られている S-M 社会生活能力検査は Vineland I が元となっている。この検査の実施は、資格が必要であるが、今回はあくまで、校内研究における対象児の客観的なデータの一つとして有資格者の指導の下に実行し、『スコアレポート』を作成した。

以上の2つのアセスメントより、対象児童は、物事についての処理能力に課題があり、また対人関係や環境からのストレスに対応する力が弱いことが予想できた。そのために、これまでも行ってきた、心理面の安定のために、教育環境の整備やクールダウンのための場所と時間の保障を継続して行うこととした。学習内容については、課題量を調整し、スモールステップで指示を出す等の支援方法もすでに実践して効果があることを共通理解した。

(2) 研究授業を行い、特性に応じた授業のポイントや支援のポイントを検証する。

研究授業を行う予定だったが、年度途中で小学部の指導体制に変更があり、実施できなかった。代替として作成済みであった学習指導案について、授業を想定しての支援方法の検討と本校として、適切な指導案の形式を検証した。

具体的な支援方法として、言語による理解と動きのある活動を得意としていることから、朗読の際は主人公の台詞は役割を決めて、ロールプレイングのように行った。また、朗読直後に感じ取れた主人公の思いをすぐに書き込めるように工夫したワークシートと同じものを黒板にも準備し、書き込めるようにすることで、集中が切れたり、乱雑な文字になることを防ぐようにした。全て書き込んだものは撮影し、ノートに貼ることとした。

学習指導案は、「岩手県立総合教育センター学習指導案様式【2020年度版】」を参考に、「児童について」の項目へ(1)で述べたアセスメントシートを活用した実態把握について「知能検査・アセスメントツールによる実態について」という項目を加えた。

また、個々の実態について理解度の確認ができる、「本時の指導に関する児童の実態及び個別目標と指導上の手立て」の項目を加えた。

6 まとめ

今回の研究対象児は、来年度より中学生となりのので、引継ぎ資料の一助となればとの考えもあり実践を試みた。

アセスメントツールについては、客観的な判断を短期間で行うには、検査方法の習熟も求められる課題はあるものの、実態把握を行うことができたと思われる。特性に適した指導・支援について、各教科の授業で各教員が取り組んでいる内容を共通理解し、学習指導案にも反映させることができた。

今回の実践は、研究対象児が中学生となり教わる環境に変化があっても、進学先で実態の把握が容易になりスムーズな引き継ぎができる資料になるものとする。穏やかな新学期を迎えることができると願っている。